

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：34437

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25780505

研究課題名(和文)シュタイナーの芸術教育を支える人間形成論的構図の解明

研究課題名(英文)Elucidation of Human Transformation Composition to Support the Arts Education of Rudolf Steiner

研究代表者

井藤 元(Ito, Gen)

大阪成蹊大学・教育学部・講師

研究者番号：20616263

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では第一にシュタイナー教育における諸々の実践が、「直観」に基づくゲーテ的自然認識を人間の自己認識へと応用したものであることが明らかとなった。そして、第二にシュタイナー学校で行われている芸術的な教育実践がそのまま、道徳教育の実践とも呼ぶことが可能であることが示された。すなわち、シュタイナー教育では、自然認識、芸術的創造、道徳的行為の三つの営為が互いに密接に関連しているのである。さらに、一般読者向けの教職関連教科書の編者を担当し、出版した。そこにおいて本研究で得られた成果を一般の読者に還元すべく、シュタイナー教育の独自性に関する解説を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study various practices in Steiner education in first is, it became clear that the Goethe's natural recognition based on "intuition" is one that applies to the human self-awareness. And, artistic educational practices that have been carried out in the Steiner school as it is, has been shown that it is possible also be referred to as a practice of moral education. That is, in Steiner education, natural recognition, artistic creativity, and moral behavior are closely related. In addition, it is responsible for the editor of the teaching profession-related textbooks for the general reader, was published. In order to reduce the results obtained in this study in which the general reader, it was discussion of the uniqueness of Steiner education.

研究分野：教育学

キーワード：シュタイナー教育 ゲーテ シラー ニーチェ 芸術教育 人間形成論

### 1. 研究開始当初の背景

シュタイナー教育は、思想家であり教育者である、ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner 1861-1925) が生み出した独自の教育実践である。シュタイナー思想 (人智学 Anthroposophie) の及ぶ範囲は、芸術、医学、経済学など広大であるが、なかでも教育分野における受容は目覚ましいものがある。「芸術」を実践の中心に据えたシュタイナー学校の教育実践は世界的に高く評価され、近年、シュタイナー学校は世界規模で急増しており、その数は全世界で 1000 を超えるといわれている。また現在、ディヴィット・ミッチェルら (Mitchell, D. & Gerwin, D. Survey of Waldorf Graduates Phase , Reserch Institute for Waldorf Education, 2007) によって北米のシュタイナー学校の卒業生調査が行われているが、その調査からもシュタイナー学校が時代の要請にかなう形で成果を出し続けていることがうかがえる。

そうした状況と呼応する形で、シュタイナー教育は現在、ユネスコからも高い評価を受けている。ユネスコは国境を越えて人類社会の平和と福祉を築くユネスコの理念に基づいた教育を促進するため、パイロット的な役割が期待できる学校をプロジェクト校 (ユネスコスクール) として認定しているのが、その中には数多くのシュタイナー学校が含まれているのである。そして 2001 年にユネスコ第 16 回理事会は世界のシュタイナー学校運動をサポートしている「シュタイナー学校芸術友の会」を「シュタイナー教育の理念と倫理的規範は、ユネスコのそれと呼応している」として「ユネスコ公式 NGO」に認定した。また、我が国におけるシュタイナー学校 (京田辺シュタイナー学校) も、この認定をユネスコ・パリ本部より受けている。

では、そのように世界的に高く評価されているシュタイナー教育は、教育学研究において、理論的見地から十分に吟味されてきただ

ろうか。教育実践の場で脚光を浴びる一方、その思想は依然、シュタイナー思想 (人智学) 特有の言説によってアカデミズムから黙殺されている。すなわち、実践への関心の増大に比し、彼の思想の理論的研究は未だ十分な蓄積を持つに至っていない。シュタイナー思想はしばしばオカルト的との烙印を押され、アカデミズムにおいて敬遠され続けてきた。

### 2. 研究の目的

こうした現状に鑑み、本研究ではシュタイナー研究において圧倒的に不足している思想研究を遂行し、その上で「実践」と「思想」の架橋を果たすことを目指した。

本研究では第一にシュタイナー教育思想の思想的源泉にまで遡ることを通じて、人智学の形成の瞬間に立会い、その思想的基盤を明らかにした。この作業を通じて、シュタイナー教育を支える基本的構図を抽出し、その上でそうした人間形成論的構図が「芸術」を通して行われるシュタイナー教育の具体的な実践のうちいかに結実しているかをフィールドワークによって明らかにした。

すなわち、国内外のシュタイナー学校を調査するなかで、シュタイナーの教育思想研究を通じて抽出した構図が実践においていかに作用しているかを解明することが第二の課題となった。こうした試みにより、シュタイナー教育における思想と実践の連関を明らかにし、思想と実践を架橋することを目指した。そしてそのエッセンスを抽出したうえで現代学校教育への応用可能性を探った。とりわけ、シュタイナー教育を一つのプロトタイプとして「芸術」を通じた教育の可能性を追求した。

### 3. 研究の方法

本研究は 思想史的アプローチを通じてシュタイナー教育思想の基本構図を抽出し、その構図がいかに実践 (「教育芸術」) のうちに結実しているかについてフィールドワ

ークを通して明らかにするものである。この基本構図の抽出に際して、本研究では、思想的観点から分析を行った。シュタイナー思想（人智学）は、しばしば思想史上の突然変異とみなされてきたが、実際の彼は先人の思想から多大な影響を受け、それらを養分とすることで思想を醸成し、苦心の末、独自の思想（人智学）を打ち立てるに至った。本研究ではこの点に着目し、人智学の思想的源泉を掘り起こすことで、人智学発生の場面に立ち会い、彼の特殊思想をその原景に遡って読み解くという方法論を採用した。つまり、シュタイナーが先人の思想をいかに読み解いたかを見ていくことで、シュタイナー自身の思想的傾向性が浮き彫りになる。その際に特に本研究で考察の対象に据えた思想家は、シュタイナーに甚大なる影響を与えた思想家ゲーテである。本研究ではゲーテとの思想的連関を読み解くことでシュタイナー教育思想に潜在する思想的構図を抽出した（ゲーテは「芸術」を高く評価しており、シュタイナーの「教育芸術」に理論的基礎を与えている）。

そして、そこで獲得された枠組みが実際のシュタイナー教育の実践のうちいかに結実しているか 国内外のシュタイナー学校での参与観察を通じて検証した。特に「教育芸術」と呼ばれるシュタイナー教育独自のカリキュラムとそこにおける芸術の位置づけを明らかにすべく、シュタイナー学校・シュタイナー幼稚園での調査を行った。そして、

この方法を連動させ、シュタイナーの教育思想が個々の具体的実践のうちいかなる形で結実しているかを読み解くことで、両者の連関を構造的に明らかにし、その教育メカニズムを解明した。

#### 4. 研究成果

国外の調査に関してはイギリスのウィンストンズ・シュタイナー学校（Wynstones School）において授業見学および教員へのインタビューを行い、イギリスのシュタイナー

学校における教育内容を分析した。

国内の調査については、シュタイナー学園（神奈川県）にて継続的に調査を行った。シュタイナー学園は学校法人を取得しており、教育基本法および学校教育法における教育目標とシュタイナー学校での教育内容が矛盾なく一致し、教育実践が営まれている。また、箕面シュタイナーこども園（大阪府箕面市）において、シュタイナー幼稚園の見学に赴いた。そこでシュタイナーの幼児教育においてどのような点に配慮して教育が営まれているか、教員へのインタビューを通じて調査した。

かくして、シュタイナーとゲーテの思想的連関を掘り起こし、国内外のシュタイナー学校の調査を行ったことで以下の研究成果が得られた。

##### （1）シュタイナー教育におけるゲーテ自然科学の位置づけ

本研究ではシュタイナー教育独自の実践である「フォルメン」線描をゲーテ自然科学の実践的応用として捉えなおした。これにより、人智学的意味づけとは別の仕方で、「フォルメン」の実践的意義が説明可能となった。その要点は次のようにまとめられる。

すなわち、「フォルメン」は、「フォルム」を生み出す過程、形成へと眼差しを向けることにより、静止した「フォルム」を絶えず形成過程へと還流させ、自然を動的に捉えること、自然の生成の瞬間に立ち会うことを促す実践である。そして 創造的多様性を内に含んだ必然性（メタモルフォーゼと原型）の体験であり、多様な自然を生み出す「原型」を直観する実践である。さらには その個々の生成のうち、常に「根源的なもの」（原型）を見出す実践である（原型は彼方に存在するのではない）。

ゲーテとシュタイナーの思想的連関に着目することで「フォルメン」線描が「自由」の獲得を準備する実践であることが明らか

になった。シュタイナーは、ゲーテ自然科学を出発点とし、のちに独自の思想である人智学を確立した。人智学、及びシュタイナー教育の最重要課題は、「自由」の獲得にあり(シュタイナー教育は「自由」への教育を標榜している)その思想は、まさに「直観」に基づくゲーテ的自然認識を人間の自己認識へと応用したものに他ならない。自然のうちに常に現われている「精神的なるもの」は、眼差しを自分自身に転じてみるならば、自然同様、人間のうちにも作用している。我々のうちに存する「精神的なるもの」を認識すること=自己認識こそが、「自由」獲得のための必要条件となるのであった。そして、ゲーテ的自然認識は、そうした自己認識のための前提(準備)とされるのであった。(1)の研究成果については、学会発表の研究業績のうちに結実している。

#### (2) 芸術教育と道德教育の連関

「教育(授業)は芸術に満たされていないなければならない」とシュタイナーは著書や講演の中で繰り返し述べている。一見して明らかなように、シュタイナー教育では独自の芸術的実践(フォルメン線描、オイリュトミーなど)がカリキュラムのうちに組み込まれ、最終学年では12年間の学びの集大成として卒業演劇が実施されるなど、芸術活動が日々の学校生活の中で、極めて重要な位置を占めている。だが、「授業を芸術で満たす」とは、単にカリキュラムを芸術系科目で満たすことを意味するのではない。そうではなく、国語、算数、理科、社会をはじめとするすべての科目の授業を芸術的に教えることを意味している。本研究をつうじて、シュタイナー学校で行われている芸術的な教育実践はそのまま、道德教育の実践とも呼ぶことが可能であることが明らかとなった。芸術教育をつうじて育成されることは道德教育で目指されていることと同一であり、シュタイナー教育における芸術教育は道德教育と不可分な

のである。こうした点がイギリスのウィンストンズ・シュタイナー学校、学校法人シュタイナー学園、箕面シュタイナーこども園での授業見学及び教員へのインタビューを通じて明らかになった。そして、その研究成果については業績欄に示した論文・学会発表のうち、雑誌論文、と学会発表のうちに結実している。

(3) シュタイナー学校の教員養成への視座  
国内外のシュタイナー学校におけるインタビューを通じて、シュタイナー学校においては教員養成が極めて大きな課題となっていることが明らかとなった。芸術性を重んじたユニークな教育を行ううえでは教師の力量の向上は欠かせない。教師の「わざ」はいかにして伝達されるのか。「わざ」の伝達に際しては模倣と習熟というプロセスが不可欠であり、単なる一方的な知識の伝達ではなく、熟達教師から「わざ」を盗むことが必要となる。こうした問題についての研究成果は、業績欄に示した論文のうち、雑誌論文の研究業績のうちに成果として結実している。

#### (4) 教職関連教科書におけるシュタイナー教育の紹介

一般読者向けの教職関連教科書の編者を担当し、2015年5月に出版した(図書)、本研究で得られた成果を一般の読者に還元すべく、本書において、シュタイナー教育の独自性に関する解説を行った。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

福岡亮治、井藤元 2015:「教員養成課程における教師の「わざ」の伝承」、『大阪成蹊大学紀要 教育学部篇』第1巻、査読無、207-213頁。

井藤元、高宮正貴、苫野一徳 2015:「道德の本質および道德教育への示唆—J.S.ミル、ヘーゲル、シュタイナーの視点か

らー」、『大阪成蹊大学紀要 教育学部篇』第1巻、査読無、181-191頁。

井藤元 2015：「シュタイナー学校における道徳教育と芸術教育の連関」、『ホリスティック教育研究』第18号、査読有、5-18頁。

〔学会発表〕(計 3 件)

高宮正貴、井藤元、苫野一徳 「今こそ道徳教育の本質を問う」、日本教育学会、九州大学(福岡県) 2014年8月22日

井藤元、坂井祐円、小木曾由佳 「臨生思想と遊びの人間学」、日本教育学会、一橋大学(東京都) 2013年8月29日

井藤元 「ゲーテ自然科学の実践的応用としての「フォルメン線描」—シュタイナーの「フォルメン」とクレアの「フォルムング」」、ホリスティック教育研究大会、大妻女子大学(東京都) 2013年6月30日

〔図書〕(計 3 件)

井藤元編 尾崎博美、渡邊福太郎、他、2015：『ワークで学ぶ教育学』、ナカニシヤ出版、272頁。

エドワード・R・カンダ、レオラ・ディラッド・ファーマン著、木原活信、中川吉晴、藤井美和監訳、井藤元、小木曾由佳他訳 2014：『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か—人間の根源性にもとづく援助の核心』、ミネルヴァ書房、665頁。

鈴木昌世編 井藤元他 2014：『子どもの心によりそう保育内容総論』、福村出版、220頁。

〔その他〕  
ホームページ等

翻訳：シュタイナー,R.(井藤元訳) 2015：「R.シュタイナー『ファウスト』によって開示されたゲーテの精神様式」、『大阪成蹊大学紀要 教育学部篇』第1巻、

237-243頁。

翻訳：シュタイナー,R.(井藤元訳) 2014：「ゲーテの黙示 ゲーテ生誕150周年のために」、『大阪成蹊短期大学 研究紀要』第11巻、51号、125-133頁。

書評：井藤元 2014：学校法人シュタイナー学園編『シュタイナー学園のエポック授業—12年間の学びの成り立ち』(せせらぎ出版、2012年)、『ホリスティック教育研究』、110-114頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井藤元 (ITO, Gen)

大阪成蹊大学・教育学部・講師

研究者番号：20616263